
真夏の夢

相樺りわ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真夏の夢

【Zコード】

Z8964E

【作者名】

相櫻りわ

【あらすじ】

孤独な女の子、鈴奈。そんな彼女が海に出ると、いきなりナンパに襲われる。ナンパから救つてくれたのは見たこともない男の子。その子と一緒に一日を過ごすうちにどんどん良いところが見つかり始める。しかし意外にも男の子の正体は
　?初恋物語。

(前書き)

初めて短編を書いてみます。

良かったら、読んでみてください。

ぐつたら鈴奈の一日なので、話も結構ぐつたらに進みます。
ちなみにこのお話はあたしの夢を元にしてかかれています。もちろん夢とまるつきつ同じではなくちゃんと（？）美化しましたので～
(笑)

わたしは、そう、わたしは・・・

あんな奴気にならないつて

思つていたのに・・・

あの時、気晴らしに海に行つたのが間違いでした。

わたしは、独りぼっちでした。

何時でも何処でも誰にも馴染めなくつて。

そんな自分が嫌になることはなかつたんだけれど・・・。

そのとき、沖では魚を網で取つてゐる真つ最中でした。

「おう、珍しいね、鈴ちゃん！」

鈴つて言つのはわたしのこと。

本名は鈴奈だけれど、漁業をしてゐるわたしのお父さんの友達はそう呼びます。

そのとき声をかけてきたのは松原つて言つおじさんで、わたしと特に仲良くなつてくれた人。

「はい！ちょっと気分を変えに来ました！」

「そうかい！リフレッシュか。いいねえ！鈴ちゃんも少し遊んで行つたら？」

「いえー」

丁重にお断りして、会話を終わりにして、海の家のほうに行きました。

「鈴ちゃん！久しぶりだねえ！今日はフライドポテトがうまく揚が

つたんだ。食べていかない？」

「は」

売店のおばさん。

「・・・・む」

いつものように混雑している海の家の中、いつもあいているはずのわたしの特等席が、3人の男女に取られています。

「な・・・」

あたしはどうする?ともできずに、そこに立っていました。

そうしたら、大柄の肌の焼けた男性にぶつかられてしまいました。

「うへえな! ! !

「?あつ!すつ、すみませんっ」

「んー?あれ?姉ちゃん、可愛いじゃん。一緒に遊んでかない?」

・・・ナンパ?

「い、いえ・・・わたしは」

「いいじやーん。一緒に遊ぼうよ~」

しつこい。

「いえ・・・」

と。

急に片手をつかまれた。

「は?」

「すみませーんー」の子僕の連れなんでもー! ! !

見ると横には見たこともない男の子が。

「ツんだよー・・・彼氏持ちかよー先に言えー」

勝手にキレて行っちゃいました。

「孤独・・・」

「ねえねえ君！」

「え？あー！」

肩を叩くはあたしをナンパから救ってくれた男の子。

「あの・・・？」

「ここにはいつもよく出るから、気をつけたほうが良いよー。」
・・・知ります。恐らくあなた以上に。

「はい・・・」

「それはそうと・・・僕らとお茶してかない？」

ナンパ再び！――

「いえ・・・」

といおうと思つたら、よく考えてみればその子、わたしの特等席取つた張本人なんですねー。

となれば、断るわけにも行かず。え?どうじてかつて?だつて負けるの嫌じやないですか?

「はい・・・」

OKしちゃいました。

「やつた!僕、リュウー・長内龍つて言つんだ!」

「幼い竜・・・?」

「・・・とにかく、おいで?」

「はい・・・」

強制連行されました。

いえ、いいんですけどね?別に・・・

あのグループの方たちは、みんな個性の強い方ばかりでした。

端にいる女の子。

水夜 みずよ 有還ちゃんつて言つんですね。はい、水羊羹ちゃんですね・・・

可愛いんだけど、何故かしゃべり声が大阪弁なんです。

「よろしくな、リンナ！！」

早速呼び捨てにされちゃいました。

それから、中心に座ってる女の子ですが、良椅佳麗ちゃんです。ライスカレーちゃんです。

しゃべり方は何故かすべて「にゃん」で構成されます。たまに違うの入つたりしますが大体それ。

「にゃん、にゃん、みやふ

みたいな。解読不能です。願わくば日本語でお願いしたい。

その中で長内龍君は、特に変わったところもなく。
強いて言えばわたしを特に気遣ってくれるところとか。

「ラムネいる？」

「カキ氷は？」

「泳ぐ？」

みたいな感じに。

水着を持ちあわせていないわたしは首をぶんぶん横に振りました。
個性派キャラの揃つたこのグループの中で、わたしは一体どうされてしまうのでしょうかー？

悪夢はこの一言から始まりました。

「いいじゃん！およびじつよ！！」

嗚呼、その一言が今となつてはにくいです、龍君。

押しに押されたわたしは龍君に水着を一着進呈していただき、何故か泳ぐこととなつてしましました。

「え、ちょ、まつ・・・！」

海辺育ちなのに泳ぎがそこそこできない（嘘です。全然できません）

わたしは全身全霊で反対しました。

でもそんなわたしの嫌い思いが通じるはずもなく。

めつてフリフリの白いビキニを買つていただきました。

「わーーー・・・・（絶）」

「可愛いよ！似合う！」

それは、有り得ない。わたし、フリルやレースの服を着ると、みんなに「似合わないよ」とて言われるし。自分でも自覚あるんです。わたしみたいな地味な子がこんな服に合はない」とくらい。

胸だつてないのに。

「いや、いやです・・・貧乳のわたしを見ないで・・・」

でも龍君は「似合う」って推すんです、わたしを。

水羊羹ちゃんやライスカレーちゃんのほうが絶対ナイスバディなんですよ？わかりますか？このプレッシャー。

しかも、これで外に出て、海に入るんです。わたし、小さい頃から水は苦手なのに。浮き輪持たないで水に入ったことなんて、一回もないんですよ？

結局わたしは水に入りました。空気袋もなしで。

「わ

水が肌に触れたとたん、水の恐怖が湧き上がります。

「大丈夫？水怖いの？」

しきりに龍君は気にかけてくれますが、あなたが無理に入らせたんですねよという思いで心はいっぱい。

いえいえ、いけませんこんなことを考えては。

彼だってわたしのことを考えて言つてくれているのです。

わたしだつて期待に沿えるようにがんばらなくてはいけません。

と思って少し深いところまで行つてみたけれど、やはり身体が拒絶するんです。

腰まで水がくると、固まつて動けなくなつてしまつたんですよ。

「な・・・?」
後ろを見てみれば、龍君がわたしを姫抱きしていました。

「大丈夫? 今体固まつてたでしょ。初めは浅いとこから、僕とゆつくり行こう」

「あ、は、はい・・・」

何故かそこから、わたしの視線は龍君から動かなくなっていました。

彼がこっちを向いて、目があつて微笑まれると心臓が跳ね上がつたり、近くに来るだけで正体不明の羞恥に顔が火照つたり。

『わたし、どうかしちやつたんでしょうつか・・・』

心中を小さく早い動悸と共に疑問が駆け巡ります。

でも本当に、どうしたんだろう。

ビーチバレーをしたときも、水慣れのために水に沈んでみたときも、龍君を見るたびに動悸が襲つてくるんです。そして天使が持つてきました悪夢は、あのときに起きたんです。

それは、水着ちゃんとカレーライスちゃん（あれ? ライスカレーだけ?）が帰つてしまつて、わたしと龍君だけが取り残されたあとでした。もう日もだんだんと落ちかけてきて、世界が夕焼けの優しい色に包まられてきていた頃でした。

「ね、リンナ。一緒に見たいものがあるんだけど、良いかな?」「え、はははははい」

極度の緊張状態に陥つていたわたしはすんごいどもりました。
「じゃ、いこう」

わたしは突然手をつかんだ龍君に引っ張られて、崖の岩場を登るこ

といなつてしまつたのでした。

「わ

足を滑りせどもすれば、彼はさすと抱きとめて、動悸がすゝース
ペードで・・・

「大丈夫? ! しつかり! .

いや、このふりつこてるのはあなたのせいなんです。

やつと崖の上に登りきつて、「うひか」と龍君が誘つので、行きました。

そこでわたしが見たのは・・・

「わあ・・・・・! .

沈む夕日とクロームオレンジに染まつた蒼い海。
岩の陰から見るこはとても神聖すぎて、綺麗過ぎて、素敵過れる景
色でした。

「ね、素敵でしょ。これを、君と一緒に見たかったんだ」

龍君はわたしの横で囁いてくれてこる。

そのとき、わたしの心をよぎつた強い影は、ひとつのかな單語で
した・・・

スキ

次の日。

龍君に会いたくてまた海辺に行きました。今日は浮き輪を持つて。

「おひ、珍しいねえ、鈴ちゃん! .

松原さんが声をかけてくれます。

「今日は会いたい人がいるんです」

「いいねえ。青春だ」

「ばかあ」

ひとしきりの会話を終わらせたわたしは、あの海の家に行きました。
でも・・・

いつもあいていて昨日だけはふさがっていたわたしの特等席は、ま
た空っぽになってしまっていました。

「え」

一瞬にして、頭が真っ白になりました。
と、そのとき。

「 リンナ 」

声がしました。

よく知っている、ちょっと低めのあの人の声が。

風のようにどこから流れてきたその声は、わたしの頭を駆け巡り、
消えてゆきました。

「 龍君ッ ? !

叫びました。

「 リンナ 」

「 リンナ 」

「 リンナ 」

「 リンナ 」

よく知つてゐる一つの声も混ざりだしました。

「 何処！？何処なの？・・・？！」

いろんな人が叫びながら走るわたしをじろじろ見ます。でも今のわたしにはそれは関係のない出来事なのです。全然気になんてなりませんでした。

ただ、龍君に会いたい一心で。

声がしていたのは、松原さんのいた浜辺。松原さんは船に乗つて、今張つてあつた網を引つ張りあげようとしているところでした。「まッ、松原さん！－その網、引き上げるのを待つてください！－」「およ？どうしたんだい？青春の次は漁に目覚めた？」

「違います！その網、岸に寄せてーッ」

まさかとは思いながらも、わたしは必死でした。だって今も鳴り響いているこの声は、よほど耳鳴りでなければこの網の中からしていたのですから。

「龍君！－いるの！？いるの！？」

網を引き寄せてしきりに揺らします。

何をしているのかと疑問の目で見る松原さんを氣にも留めず。

「リンナ　・・・　ここだよ・・・」

「ツ　－－龍君　・・・　・ツ」

「『めんね・・僕実は半漁人なんだよ・・・昨日はどうしてもずっと前から好きだった君にあいたくて、有還と佳麗を連れて人の姿になつた・・・でもうつかりと昼寝していたらこんなことこ・・・情けないよね・・・」

そんな・・・！

わたしは予想外の告白に驚いたけれど、今は ツ。

「ふ、一人は無事なんですか？！」

「うん。有還は無理やり出ようとして背びれが破れたけど。佳麗は人の姿になつて陸に上がつてたから無事。誰も死んでないよ」

「！！！だ、ダメですって・・・逃げて！ほら、穴を大きくしますから・・！」

「リンナ。今逃げてももうこれから君とは会えないんだよ・・？半漁人の秘密がばれたから」

それを聞いて、張り裂けるような胸の痛みを覚えました。でも滲みくる涙を振り払つて、叫びます。

「それでもいいです！いいから、生きてください！逃げて、生きて！また縁があつたら会えます！」

「ちょっと待つて、リンナ。一つだけ、伝えたいことが 〇。」「逃げて」

「聞いて。僕、リンナのこと」

「ほら・・・」

「ずっと好きでいるよ！――！」

わたしはびっくりして龍君を見つめました。

その龍君は今、人型になつて水の中から首を出しています。

ふつと、わたしは微笑んでみました。

「・・・わたしもです」

そしてどちらともなく顔を近づけ、口唇の重なる感触を感じま

いつして、わたしの1日だけの初恋は幕を閉じたのでした。

終

(後書き)

いかがでしたか?
ぐうたらでごめんなさい。
しかも中途半端な終わり方ですね。
もし人気が出たら続編も書こうと思ひます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8964e/>

真夏の夢

2010年10月17日04時48分発行